

Title	C・ライト・ミルズの知的職人論と社会学的啓蒙： 現代社会学の地平とその批判的考察
Sub Title	C. Wright Mills : intellectual craftsmanship and sociological enlightenment
Author	川合, 隆男(Kawai, Takao)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1985
Jtitle	法學研究 : 法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.58, No.2 (1985. 2) ,p.131- 166
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	林烈先生退職記念号
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19850228-0131">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19850228-0131</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## C・ライト・ミルズの知的職人論と社会学的啓蒙

——現代社会学の地平とその批判的考察——

川 合 隆 男

- 一、はじめに
- 二、C・W・ミルズの生涯と知的職人論
- 三、批判的社会学
- 四、個人的問題と公共的問題
- 五、むすび

バラバラの断片としてではなく、また知的な対象領域自体あるいはシステムそのものとしてではなく、人間を理解するように試みよう。歴史的、社会的行為者として人びとを理解するように試みよう。そして、さまざまな人間社会によって、さまざまな人びとが複雑に選択され組織される、諸様式を理解するように試みよう。たとえ間接的でも、ときたまのことであってもいいから、あなたがどんな仕事をも仕上げる前に、あなたの生きている時代の構造と漂流、形成過程と意味について、つまり、二〇世紀後半の人間社会のおさるべき、そして壮大な世界を理解するという、中心的で、継続的な課題にてらして、その仕事を見定めよ。(C. Wright Mills, *The Sociological Imagination*, Oxford Univ. Press, 1959, p. 225)

## 一、はじめに

現代社会の歴史的・社会的変動が激動的なものであると同じように、われわれがかかわる学問や知的作業も著しく変化してきている。最近に手元に届いた日本社会学会誌『社会学評論』(第三五巻一号、一九八四年六月)をみても、「パーソンズ以後」の特集を組んでいる。かつて、一九五九年にアメリカ社会学会大会の会長就任講演においてK・デーヴィスが、T・パーソンズを中心とした機能的分析方法は、社会学や社会人類学の一つの特殊の方法ではなく、まさに社会学的分析そのものであり、機能主義をめぐる神話を捨て去るべきである、とした一九五〇年代から六〇年代前半当時の構造機能主義、そして対抗的なマルクス主義を基軸とした社会学の動向とは、いまやその様相を大きく変えてきている。

特にアメリカ合衆国を中心とした、パーソンズに特徴づけられる構造機能主義、ソ連を中心とした正統派マルクス主義が、一九五〇年代から一九六〇年前半にかけて、社会学、社会科学における理論体系として精緻化し広く注目され支配的な位置を占めていった。しかし、T・クーンの『科学革命の構造』(一九六二年)の論理に照せば、これらの理論体系、方法体系が「パラダイム」体系として広く通常科学化し、非歴史的な一般理論化し、体制的に装置化していく過程で、次第に、あるいは突如としてその通常の「パラダイム」では解き得ない変則性の事態に直面していく。人間を理解し人間の社会的歩みをしっかりと位置づけていく筈の社会科学が、ますます抽象化され一般理論化され、通常科学化されていくことによって、統合主義・規範主義・保守主義・客観主義・脱イデオロギーの理論、体制的な行動科学と化していく。それらが政治体制や産業科学秩序、教育秩序としばしば結びつくことによって、人間への関心や歴史への関心から逆に遠のいていく傾向もあった。

一九六〇年代後半以降の人々のさまざまの動き、運動、世相、風潮、問題状況は、一面では産業社会体制の成熟、

爛熟であるとともに、新たな歴史的転換をも示しているともいえる。われわれはもはや近代社会、近代市民社会、大衆社会の延長線でそのまま現代社会を論ずることはできないし、現在の社会主義体制もユートピアたり得ない。こうした脈絡のもとでは、今日さまざまな現代社会論が提起され、さまざまなパースペクティブ、いわば潜在的な「パラダイム」が展開され、再評価されていくのは、極めて適切な動向といえる。

すでに一九六〇年代に用意されつつ七〇年代以降活況をおびてきたA・グールドナー『西欧社会学の危機』(一九七〇年)に例示される構造機能主義、そして「正統派」マルクス主義に対する批判、さまざまなパースペクティブ(理論的・方法的な視座)、すなわち、機能主義(functionalism)、葛藤・闘争理論(conflict theory)、社会的交換理論(social exchange theory)、象徴的相互作用論(symbolic interactionism)、エスノメソドロジー(ethnomethodology)、構造主義(structuralism)等の展開と競合、そして、「社会学の危機」、「社会学の社会学」に示される知識社会学的研究、実証主義論争、社会調査方法論上の検討等が繰り広げられてきた。

だが、特にわが国における現代社会学の動向は必ずしもそのまま肯定し得ない傾向があるように、わたしには思える。尾高邦雄が著書『現代の社会学』(一九五八年)の中で、現代社会学の主要傾向として(1)国際化、(2)統合化、(3)多様化、(4)実用化、(5)精密化、(6)理論的体系化、(7)研究課題の新傾向を挙げているが、すう勢としては今日までそれらの傾向を著実に確かにたどったことも否定しない。しかし、「パーソンズ以後」に示される如く、わが国の現代社会学の動向は理論的な面においても社会分析においても、特に理論的な面においてあまりに「1以後」、「パラダイム転換」、「新しい潮流」に「漂流」しすぎているように、思える。それを「流行への過敏性」であるとする鈴木広による指摘は一層痛烈である。鈴木は、更に「しかもそれは現状分析にまで及ぶことは少く、つぎつぎに別のファッションに移っていく。現状分析という生産ではなく、どこかで生産された流行を追うという消費が、日本社会学会の一定型をなしている」と述べている。現代社会学は、現代という意味において地平が広がり流動的であり、「流行への過敏

性」を能動的な対応といえないことはないとしても、知の座標軸、知の定点を見失ったままの「以後」や「潮流」は、やはり漂い流れ続けざるを得ないだろう。また、それらの動きは、依然、西欧先進社会としての限られた「世界」の動きであり、歴史的にも限定されるものが多い。

われわれにとって今日必要なことは、新しい潮流の出現してくる背景とその意味、理論構成を確かめると共に、さまざまなパースペクティブの競合する状況を「可能なるカオス」として理論的にとらえ直し、現実の歴史的な変動を見定め得るような視座と方法と分析とを確立していく試みではなからうか。

この小論では、現在の「新しい」潮流に対して少々後戻りすることになるが、C・ライト・ミルズ（Charles Wright Mills, 1916～1962）の社会学を再考察することによって、右の課題にこたえる一つの手懸りにしていきたい。ウェーバー、マルクスやエンゲルス、デュルケム、ジンメル、C・ブース、G・H・ミード、マンハイムやパーソンズ、マーソン等の名だたる社会学の巨頭達に比して、そして新たな社会学の動向を前にいまさるミルズでもあるまいという意見もあるかもしれない。しかし、ここでは、現代社会学の新たな地平が切り拓かれつつある状況のもとでミルズ社会学を再掘しミルズが意図していたものは何んであったのかを、検討しておきたい。

一九六二年に四十五才で急逝してしまったミルズは、『ホワイト・カラー』（一九五一年）、『性格と社会構造』（一九五三年）、『パワー・エリート』（一九五六年）、『社会学的思想力』（一九五九年）、『聞け、ヤンキー』（一九六〇年）等の書物を通じて、社会学の領域内にとどまらず広く一般に注目され、さまざまな評価と論争を繰り広げてきた。<sup>(5)</sup>だが、構造主義批判や硬着したマルクス主義批判の先鞭を切り「ラディカル・ソシオロジスト」と称されて鋭い現代社会論として脚光をあげ論争の渦にまきこまれたわりにはミルズの社会学、社会理論そのものの全体像についてはいまだ充分深められていない。<sup>(7)</sup>

日本においても、ミルズの著書の殆んどが翻訳されて広く読まれているのは確かである。しかし、ミルズの世界

論全体についての研究は依然限られたものでしかない。<sup>(8)</sup> 翻訳書の巻末に付された解説やミルズ論も各々の当該書に限定されたものが多い。一九七〇年代に始まる「社会学の社会学」をめぐっても、その問題化が圧倒的にミルズの感化影響を受けたものであるとされながら、<sup>(9)</sup> ミルズ社会学、社会学理論そのものの研究は深められていない。ミルズ社会学理論の特徴と位置づけについても、D・マーチンデル『社会学理論の特徴と類型』（一九六〇年）を受けて、「社会行動主義」、<sup>(10)</sup> その中でも「象徴的相互作用説」のところにガース（Hans Gerth）とミルズを位置づけるままになっている場合が多い。こうした位置づけではミルズ社会学理論を全体的に把握しているとはいえない。更に、ミルズ社会学理論、知識社会学は、現実の社会分析と鋭くかかわって展開されたことは重要である。

そこで、本稿ではミルズの(1)方法論、(2)社会学理論、(3)社会分析の特徴をできるだけ相互に関連づけながらいくことにする。以下(1)ミルズの生涯と知的職人論、(2)批判的社会学、(3)個人的問題と公共的問題（私的問題と公的問題）の順序で素描しておくことにしたい。

## 二、C・W・ミルズの生涯と知的職人論

ミルズ（Charles Wright Mills）は、アメリカが対独宣戦しロッキンヤ革命が成立する一年前の、一九一六年八月二八日にアメリカ南西部のテキサス州の Waco という小都市で生まれた。イギリス人とアイルランド人を父母とするカンリックの家系であった。母方の祖父（Braxton Bragg Wright）は「フロンティア」のカーボーイの男として生きた牧場主であったが、父（Charles Grover Mills）は保険業に従事するホワイト・カラーであった。母（Frances Mills）は教師で、後にカレッジの教授になっている。幼少年時代にテキサス州内の Sherman, Fort Worth, Dallas 等と転々として育った。高校を卒業するまでに八度も引越しを経験し、必ずしも幸せでない、孤独で内省的な性格の少年時代を過したが、しかし、自ら正しいと考えた時にはきっぱりと主張していく態度を身につけて育っていった。

高校卒業する二〇才前後の時期はミルズにとっても、二転三転の試行錯誤の青年期だったようで、高校生の途中で、大工仕事や建築に関心をもって技術学校 (Dallas Technical High School) に編入し一九三四年に卒業する。そして恥かしがりでひっこみがちな若者を「男にする」という父の言葉でその年の秋に Texas Agricultural and Mechanical College という軍関係の農工大学に入るが、校内スポーツクラブ (レスリング) の練習試合中に起った事故のおもわぬ波紋や軍隊組織や訓練のもとでミルズは惨めな一年間を過すことになりひどい情緒不安定、神経症に陥ってしまう。

一九三五年にオースチンのテキサス大学に移り、新しい知的環境のもとで性格的にも積極的でたくましくなり彼の思想形成と学問生活を開始していくことになる。この頃よりミルズは、ファースト・ネームの「チャールズ」をCと記して、母方の祖父の名に連らなるセカンド・ネームを強調して C. Wright Mills の呼びかたにするようになった<sup>(11)</sup>。学部学生の一九三八年に最初の夫人 Freya Smith と結婚している。このテキサス大学で、かつて G・H・

ミードのもとで学んだ G・ジェントリー (George Gentry) T・ヴェブレンの助手であった経済学の C・エイアーズ (Clarence Ayers) 等に学ぶことよって、プラグマティズムや批判的思想というアメリカの知的伝統を踏まえて自らの哲学思想、社会思想の形成を図っていくことになる。一九三九年にテキサス大学院に提出されたミルズの修士論文は、"Reflection, Behavior, and Culture: An Essays in the Sociology of Knowledge," であった。

大恐慌が渦巻き、大不況、労働組合運動の胎動、そして、ニュー・ディール政策の実施、ナチズム、巨大な権力機構の出現、第二次世界大戦への突入と続く一九二〇年代末から一九三〇年代は、人間生活の根幹が大きく揺さぶられ人間の「理性と自由」の意味が新たに問われてくる歴史的な激動期であった。ミルズの経験した少年・青年期は、このような歴史的激動を背景とするものであった。しかし、この時期の彼は二〇年代の基本的な思想を読みふけたとしても、政治的に目覚めた青年ではなかった<sup>(12)</sup>。ミルズは、「片手にヴェブレン、他方の手にデュローイ<sup>(14)</sup>」をたずさえて、スポーツ好きの健康でたくましい青年として、一九三九年に二十三才の時にテキサスを離れて中西部のウィスコンシ

ン大学院博士課程に進む。そこで、かつてドイツのケルン大学に留学して、ヨーロッパの社会思想やドイツ社会学、特にM・ヴェーバー、更にシカゴ学派の影響を受けたH・P・ベッカー(Howard Paul Becker)、ヨーロッパから亡命してきた、マンハイム、ヴェーバー研究者のH・ガース(Hans Gerth)の指導のもとで研究することになる。<sup>(15)</sup>ミルズは、主に知識社会学の研究を中心に、一九四一年に、『A Sociological Account of Pragmatism』と題する博士論文を提出している。この論文は、ミルズの死後にI・L・ホロヴィッツの手で『社会学とプラグマティズム』(一九六四年)の題で出版されている。

大学院を終えたミルズは、一九四一―一九四五年の間、東部のメリーランド大学の社会学部の助教授をつとめる。ミルズは第二次世界大戦に批判的であり、大戦が非理性的に思えた。徴兵令状が届くが、結局は彼が高血圧症のために軍より拒絶されている。ナチズムと同様にアメリカ合衆国も、彼の目には次第に巨大な軍事的強権産業国家、戦争経済国家になっていくように見え、この動きと対決していく政治的立場を強めていく。対抗勢力としての労働勢力や知識人の政治的役割に関心を深めていくようになる。

一九四五年にニュー・ヨークのコロンビア大学に移り、一九五六年に社会学の教授となっている。当時のコロンビア大学の社会学部にはマッキーバー、リンド、マートン、R・ラザースフェルド等の学者がおり、またコロンビア大学は当時ドイツ、フランクフルト学派の亡命学者達、アドルノ、フロム、ホルクハイマー、マルクーゼ、ノイマン等の学者達の研究上の基地にもなっていた。ミルズは、短期間大学院でも教えたが、敢えて学部学生を教えることを望んだといわれる。一九四五年―四八年はR・K・マートンによる任命で「応用社会調査研究所」の労働調査部局の主任をつとめる。ミルズは、マッカーシー旋風が吹き荒れた後の一九五〇年代、六〇年代前半の偉大な国家アメリカでの「イデオロギーの終焉」運動の中で、いよいよ批判的にたたかいたけが続け、怒れる政治的知識人として孤軍奮闘していく。権力論三部作、すなわち、労働組合指導者を扱った『新しい権力者たち』(一九四八年)、中間階級についての



『ホワイト・カラー』（一九五一年）、権力上層部をめぐる『パワー・エリート』（一九五八年）を矢継ぎ早に発表し、権力上層部の無責任と大衆社会における市民層の無関心と「陽気なロボット」化を指摘する。そして『性格と社会構造』（ガースとの共著、一九五三年）、『社会学的想像力』（一九五九年）、『人間のイメージ』（編集、一九六一年）、『マルクス主義者たち』（一九六二年）などの社会学理論や知識社会学に関する本を書き、編集している。そして見落されがちだが、プエルトリコ移民についての調査研究、キューバ革命、第三次世界大戦をめぐる書物を発表している。

ミルズの関心は、特定の立場に固執することはなかったが、ますます政治的志向性を強め、活躍の舞台は合衆国を越えてヨーロッパ大陸、ソ連、キューバ、中南米等の第三世界へと広がり、思想的にもマルクスへの関心を深めていく。この間、ミルズの提起した問題への反響は極めて大きかったが、脚光、賞讃、名声とともに、中傷や非難、否定的評価も多く、健康を害し（心臓発作）、家庭上の変転（最初の結婚生活が破れ一九四七年に「応用社会調査研究所」で働いていたRuth Harper 女史と再婚し五七年に離婚、そして第三番目の夫人 Yaroslava Surmar Mills を迎える）等を経験しなければならなかった。新たな飛躍を期した、そして半ば傷心したさすらいの、国外旅行でもあった長い旅から帰国して約二カ月後の一九六二年三月二〇日にミルズはニューヨーク市のハドソン川沿いのナヤークの自宅でやはり心臓発作のために四十五才で急逝してしまった。国際比較社会学等の未完の書を残して、プラグマティストで、フロンティアを追い求め続けた、「アメリカン・ユートピアン」のミルズは起伏の多い生涯を突進して死んだ。<sup>(16)</sup> キューバ危機、ベトナム戦争、人権運動等の渦の前に、激しく怒り叱咤し、論争をいとも続けて西部の大男はこの世を去っていった。さて、ミルズの生涯と彼の仕事から何を学ぶことができるか。彼の社会学理論、社会分析をみていく前に、まず彼が重視していた知的作業における方法論をみておくことにする。ミルズの生涯を貫いているスタイルは、実際の重要性にそくして行為するというプラグマテスタのそれであり、大地に足をつけた職人 (craftman) の生き方であったと考える。「知的職人論」<sup>(17)</sup>を通じてその方法論の特徴を把握しておきたい。これは、知的な研究を志す若者に「知的職人

たれ」と呼びかけたメモ風のメッセージ(「知的職人のすすめ」)でもいうべきもので、整ったものではない。しかし、そこに貫いている態度、考えと方法は、フロンティアの開拓者、建設者であった祖先の如く、また彼が少年時代に大工仕事や建築の職人仕事に関心を示したように、学問や知的活動を自らの手で創造していく作業として実践さようとするものであった。

(1) よき職人たれ。……率直な知的職人の復権をはかり、みずからそのような職人たるべく努めよ。あらゆる者は自己の方法論者となり、あらゆる者は自己自身の理論家となれ。……人間と社会の諸問題に主体的に対決する精神たれ。

(2) 自己自身に対し、また他者に対して、明瞭にして簡潔な叙述を要求せよ。

(3) 作業が必要とするならば、超歴史的な概念構成を敢えておこない、歴史下のな瑣末事をもきわめつくせ。全くの形式的理論を、さまざまのモデルを、可能なかぎりよく構成せよ。

(4) 孤立した小状況のみを、あれこれと研究するのはよくない。それらの小状況を組織づけている社会構造を探求せよ。

(5) 世界史上にかつてあらわれ、現に存在している社会構造を、充分に比較して理解することを狙え。

(6) 研究にあたって規定している人間のイメージ——人間性にかんする一般的観念——にむかってつねに眼をひらけ。歴史のイメージ——いかにして歴史はつくられるか——に対しても同時に眼をふさぐな。歴史の諸問題、個人生活史の諸問題、個人と歴史とが触れ合う社会構造の諸問題をめぐる君の見地を、たえず鍛えなおすようにせよ。個性の多様性と時代の変化の諸様式とを直視せよ。見るもの、想像することを、人間の多様性の研究への手掛りとしてとり入れよ。

(7) 君が古典的社会分析の伝統を受けつぎ、かつ遂行していることを知るべきである。

(8) 多くの私的な問題も、たんに個人的な問題として解決することはできず、公的な問題の枠組のなかで歴史形成という問題文脈のなかで理解しなければならぬことを知れ。また公的な諸問題の人間の意味は、それを私的な問題に——個人生活の諸問題に——関連させることによって、説明されねばならぬことを知れ。<sup>(18)</sup>

これらの箇条書にされた指摘は、ミルズ自らの知的職人であるべしという信念と自ら実践している自負にもとづいたものである。「ノートをとる作業」や「ファイルをつくる」作業からミルズが述べ初めているこの「知的職人論」

をわたしなりに整理し直すなら、次のような特徴を挙げることができる。

(i) 徹底して知的職人であること。理論家、分析者、観察・調査者等が個々にバラバラの活動ではなく、自らの頭と心と手足と技能とを自ら動かし活用して知的作業を進める職人であること。いきすぎた専門職主義化を批判して一人の人間としての知的職人であること。(ii) すぐれた職人、古典的社会科学者がそうであったように、古典的な伝統の継承とそれによる訓練、知的創造の重要性。(iii) もっとも基本的な視座として人間のイメージと歴史のイメージとを相互に結びつけて理解し多様な人間がかかえる諸問題を説明するようにすること。根底的に「人間が歴史をつくる」という視座から把握すべきであり、個人生活史と全体的な社会構造とが関連づけられ、多様な経験、生活のうちに人間生活を見、「人間の声」を聞き、「人間の声」で人々に語るべきである。<sup>(19)</sup>

(iv) 「人間の声」を聞き、また「人間の声」で語りかけていくという行為を知的作業として自覚していること。「人間の声」を軸に社会的現実の真只中に身をおいての社会観察によって得られる「発見の文脈」（見て聞いて、そして考えること）と「提示の文脈」（考え続けて、そして語り、書くこと）とが相互作用し相互媒介されなければならない。「君はこれら二つの文脈の間を往復し、しかもつねにどの位置にあるかを意識していなければならない。」<sup>(20)</sup> 知的職人の作業とは見ることに、聞くことに、考えることに、話すことに、書くこと等が一体となった人間的作業である。ミルズの知的作業の関連について考え方をわたしなりに勝手に図化すると、図1に示したようになる。「人間の声」（人々のさまざまな不安や無関心、話題、叫び、笑い等）を中軸に発見、記録、提示、再編成の文脈が相互に関連づけられて展開される知的作業を示している。人間の多様性にもとづくさまざまな「人間の声」をどのように聞き、どのように語っていくかは、ミルズにとっても、われわれにとっても依然として根本的に重要な課題である。

(v) よりはつきりと思考し、より適確に書くために「相関分類」（交差分類）（cross-classification）の方法を活用すること。<sup>(21)</sup> これは、ミルズの発想の大きな特徴であり、積極的に類型構成を展開し活用していくことである。既成の分類、常識

図1 ミルズの知的作業の関連図

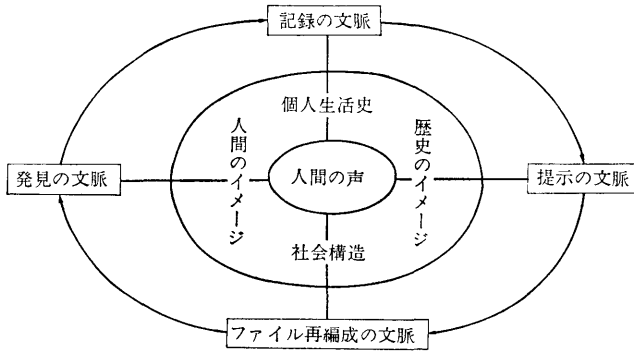


図2 産業関係における労働者の諸範時

		権力の客観的構造	
		参加	非参加
個人の 主観的 条件	満足と 自発性	①疎外されない労働者	②操作された擬似的志気
	不満足と 不本意	③不満：非適応的な労働者	④疎外された労働者

(引用) John Eldridge, C. Wright Mills, 1983, p.39, C. W. Mills, "The Contribution of Sociology to Industrial Relations," Proceedings of the First Annual Conference of the Industrial Relations Research Association, ed. by Milton Derber, Dec., 1948, pp. 199-222.

図3 研究方法における抽象レベル, 観察, 説明

抽象レベル		問題	説明
巨視的	1	2	
微視的	3	4	

(引用) ミルズ「社会科学研究の二つのスタイル」『権力・政治・民衆』(訳書), 433頁。

的な分類に満足しないで、その分類や類型相互間の共通要因や区別要因を絶えず探求し、考えるときに使用する言葉やとり扱っている事実の、範囲と全関連が明確にされる。いわば、現象を相互に関連づけていく一つの文法でもある。この方法は、ある現象について複合的で多次的に考察させ、問題を鮮明にし、あるいは新たな視点を明確に強調させることを可能にする。図2は、ミルズのこうした試みの一例である。しかし、ミルズにしばしばみられるように、

用語法等にしても、エリートと大衆、権力者と権力をもたざる小さな人、個人と社会構造、私的問題と公的問題、絶望と得意、貧者と浪費家等のように、関心を集中させ、問題を浮彫りにするにしても、現象をあまりにも単純化した問題を対極化させていく傾向が強い。要は、「相関分類」の構成の仕方にかかっているが、ミルズの方法論の一つの重要な特徴といえる。<sup>(22)</sup>

(vi) 「社会科学研究の二つのスタイル」<sup>(23)</sup>の間の結節点を求めるようにすること。社会科学研究に、一つは「いかにしてプロテスタンティズムが資本主義の興隆と関連しているのか」、「合衆国にはなぜ社会主義運動が存在しないのか」などの探求のように巨視的な方法、他方に非常に限定的な市場調査等のようにしばしば特定の依頼主から委ねられた小範囲の問題について統計学的分析手法を試みて報告するといった微視的方法、という二つのスタイルがあるという。先の「相関分類」法に従ったこの問題をめぐるミルズ自身の図（図3）によると、スタイル相互の結節点を見い出していくには、図の中の1、2、3、4がバラバラのままそれぞれのレベルで各々孤立させるのではなく、「なぜある人びとがヒットラーに従ったのか」という問題および説明の仕方にしてもそれぞれで、しかも相互に関連づけていく必要がある。「問題の提起、およびその解決の両面において、われわれは巨視から微視へうつらねばならない（1から3へ、2から4へ）、そのあとでふたたび巨視的な立場へもどってくる（3↓1、4↓2）」<sup>(24)</sup>。そうしてからはじめて、巨視的レベルのあいだの関係（1と2）についてより細かいことがとりあげられる」とする。

われわれは、ミルズの社会学が、社会学論や、権力論の問題提起等に限定されない、あるいはそれらを支える方法論、知的作業の方法に強い関心をいただき、いかに知的職人として生きようとしていたかをも識ることができる。

### 三、批判的 sociology

ミルズ社会学の社会思想と社会学論にみる特徴は、どのようなものだろうか。たしかに、彼の関心の広範な拡がり

と急逝したミルズの短い生涯からしても、それらの特徴が深められ、体系的に整序され、完結されたものとして、とらえることは難しい。

I・L・ホロビッツは、ミルズの学問上の経歴を「社会哲学と社会についての学問の古典への完全な埋没の時期」、「一九四〇年中葉の経験的な調査に徹した時期」、そして「この二つの関心を社会学的反省のなかで実現可能な形で結び合わせる努力をした時期」の三つの時期に区分して基本的に伝記的な視座から「アメリカン・ユートピアン」としてのミルズの社会思想形成と社会分析を克明に跡づけている。<sup>(26)</sup> イギリスの社会学者J・レックスは、社会学の巨匠としてヴェーバー、マルクス、マリノフスキー、F・エンゲルスとともにミルズをとりあげて、哲学と社会学理論の古典的伝統のもとで徹底して育まれ、コントやマルクス、ヴェーバーと同様に自らの生きている時代の歴史の意味を解明する課題ととり組んだ革新的な学者として位置づけている。そしてレックスは、ミルズの社会学形成に影響を与えた要因として(i)プラグマティズムの哲学的遺産、(ii)社会成層やマス・コミュニケーション等の経験的研究、(iii)一九三〇年代にアメリカにやってきたすぐれた亡命学者集団との接触、(iv)冷戦との彼自身の出会い、(v)彼の同僚達の政治的な臆病についての自らの反省、を挙げてゐるのは興味深い。<sup>(26)</sup>

しかし、ここでは基本的にはホロビッツやレックスの把握に示唆を受けつつも、ミルズを現代社会学の地平および現代社会の歴史的課題のただ中に生き、人間社会を貫く歴史的指針を模索し、闘い、説き続けた社会学的啓蒙者、批判的社会学者として理解しておきたい。そこで、ミルズ社会学の思想的、理論的特徴を(一)古典的伝統の継承、(二)知識社会学と批判的社会学、(三)社会理論の構成、の三つに限って簡潔に触れていくことにする。

(一)古典的伝統の継承　ミルズの倦むことを知らぬ思想形成における特徴の一つは、マルクス、ヴェーバー、ヴェブレン等がそうであったように社会学に限定しない哲学や社会科学の古典的伝統の徹底した、しかも巾広い継承を試みようとしたことである。このことは、青年期におけるプラグマティズムやヨーロッパ社会思想、社会科学との出会

いから後半にはマルクス主義へ傾斜する動きがみられたとしても、ミルズの生涯を貫いた姿勢である。古典的伝統を継承して現代社会の歴史的課題を捉え、またその歴史的課題に照らして古典的伝統に立ちかえりつつ批判していくという姿勢である。

ミルズが編集し序文を書いている『人間のイメージ——社会学的思考における古典的伝統——』(一九六〇年)のなかに、こうした特徴が如実にあらわれている。<sup>(27)</sup>この書の「第一部、障害と志向」ではW・リップマン、H・スペンサー、K・マンハイム、「第二部、社会の諸類型と諸傾向」ではマルクスとエンゲルス、ヴェーバー、T・ヴェブレン、G・モスカ、R・ミヘルス、A・パレート、H・スペンサー、J・シュンペーター、「第三部、個性の危機」ではW・I・タマスとF・ズナニェッキ、ジンメル、デュルケム、マルクスとエンゲルス、マンハイムがとりあげられている。こうした試みは、ミルズの初期の知識社会学に関する論文「言語、論理、文化」(一九三九年)、「知識社会学の方法論上の帰結」(一九四〇年)、「状況化された行為と動機の語彙」(一九四〇年)、マンハイムの『変革期における人間と社会』<sup>(28)</sup>についての書評等、博士論文である『プラグマティズムの社会学的説明』(一九四二年)、H・ガースとの共訳書『マックス・ヴェーバーから——社会学論集——』(一九四六年)、ヴェブレン『有階級の理論』への「序文」<sup>(29)</sup>(一九五三年)、ガースとの共著『性格と社会構造』(一九五三年)、『社会学的想像力』(一九五九年)、『マルクス主義者たち』(一九六二年)などにも、明確に展開されている。ミルズはアメリカ合衆国の古典的伝統、遺産としてのプラグマティズムから実践的で批判的精神、人々の相互作用による社会構成的な視座、そしてヨーロッパの亡命学者集団を通じての古典的伝統としての巨視的な社会科学的視座等を学ぶことができた。

ミルズが社会科学における古典的伝統の継承を説くときに、特に強調されているのは次のような諸点である。(i)その古典的伝統においては、概念や理論体系が一人歩きしてしまうのではなく、あくまで人間のイメージをめぐって、社会と歴史と個人生活史の諸概念が求められそれらがいつも密接に結びつけられているのであり、無数の特殊な個人

的生活状況がより巨視的な歴史的社会的構造の文脈のなかで位置づけられているのである。<sup>(30)</sup>「人間はそれ以外のどんなものであるにせよ、かれは社会的歴史的な構造との密接で複雑な相互作用のなかで理解されなければならない、社会的歴史的な行為者」なのであり、われわれは、事実、「人間についてあまり知っていないこと」を想起すべきである。<sup>(31)</sup>

(ii) 古典的伝統においては、科学的探究や「事実」発見の願望が、事実の物神崇拜化や調査方法の標準化、限定的な調査主義に走るのではなく、人間の「理性と自由」という基本的価値、道徳的価値と関連づけられて社会科学の探究が繰り広げられる。「社会科学が道徳的に約束することは、自由と理性とを貴重な価値として守ること、それらが問題提起のなかで真剣に、たえず、創造力豊かに駆使されるということであろう」。<sup>(32)</sup>ミルズの社会学、知識社会学、社会分析、歴史認識のうえで、この理性と自由をめぐる倫理的問題が、絶えず根底にすえられている。「人間は歴史をつくるのか」という問いに絶えず結びつけられていく。

更に、前節のミルズの知的職人論で触れたように、(iii) 古典的伝統においては、「方法」と「理論」を自由に駆使できるといふ職人の方法が生きている。<sup>(33)</sup>そこでは、人間社会についての多様なイメージ、モデル、方法が活用されなければならぬ。ミルズはこのような考えから社会科学における古典的伝統の継承を重視し、現代の社会学者がこうした伝統を怠惰にも軽視してきた動きを痛烈に批判する。

(二) 知識社会学と批判的社会学 一九二〇年代、三〇年代になると、フランスやドイツだけでなく、アメリカや日本等においても知識社会学が新しい学問分野として登場して人々の関心を集めていく。<sup>(34)</sup>近代社会を支えてきた社会構造が歴史的に大きく変容し、人間の精神活動、精神的所産、精神的志向との関連をあらためて問いかけていかざるをえないという現代社会の「一定の複雑な社会的、文化的諸条件の下に」知識社会学は重要性をもつに至り、そうした条件のもとでは「社会的葛藤の増大と共に、諸集団の価値、態度および思考様式の相違が大きくなって、遂にはこれらの諸集団が以前共通にもっていた指向が、互いに相容れない相違のために蔽われるようになる」。<sup>(35)</sup>

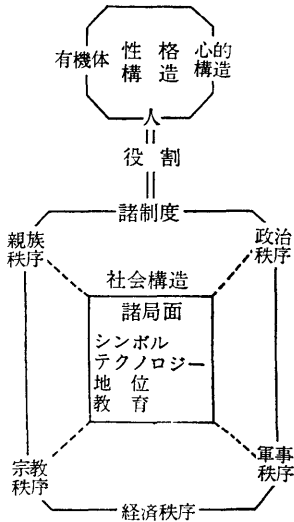


R・リンド『何のための知識か』(一九三九年)に象徴されるようにアメリカ合衆国の諸価値が問われるにいたるミルズが立たされた歴史的社会的状況、アメリカ社会思想研究、プラグマティズムについての研究、特にウェブレン、J・デューイ、G・H・ミードの社会心理学的研究、ミードの知識社会学の視座、H・ベッカーやH・ガース等を通じてのヨーロッパ社会思想、知識社会学との接触等が、ミルズを知識社会学的研究へ向寄せたと考える。

I・L・ホロビッツの手で『社会学とプラグマティズム』の題で後に公刊されたミルズの『プラグマティズムの社会学の説明』(一九四二年)では、特にC・パース、W・ジェームス、J・デューイを集中的に検討し、そしてG・H・ミード研究の重要性に言及している。一九四〇年前後に書かれた彼の論文や書評をみても、この当時にミルズが知識社会学的研究に没頭し、M・シェラー、マンハイム、デュルケム、M・グラネ等を読んでいたのを知ることができ。これらの初期の研究を通じて、ミルズは科学的な方法態度、行為論、コミュニケーション論、実践的で批判的な精神と政治哲学を学びとると共に、知識社会学、社会心理学への関心を強めていくことになる。そして、マンハイムの『変革期における人間と社会』については賞讃を寄せつつも、社会心理学的接近や権力論、歴史分析の欠如を鋭く批判していたことは注目される。

その後、第二次大戦終戦後から一九六二年までの彼の生涯の後半期にかけては、現実の経験的調査を踏まえた社会分析や社会理論構築への関心を増していくにつれて、彼の社会学は知識社会学であると共に、知識や科学についての社会学から、知識と権力、現代の漂流し続ける知識や科学のあり方、既存の正統科学に安住する知識人、個別な日常生活の私化と歴史的社会的な動きの全体化とが、相互に関連づけられないままに揺れ動いていく状況、存在根拠そのもののあり方等を批判していく急進的な批判的社会学の様相を強めていったといえる。それらの具体的な展開の例として、『新しい権力者』、『ホワイト・カラー』、『パワー・エリート』の権力論三部作、超歴史的で一般的な誇大理論を求める動きや抽象化された調査経験主義を鋭く批判した『社会学的理想力』、『率直なマルクス主義』に對比して、

図4 性格と社会構造の構成要素および連関



(引用) ガース=ミルズ『性格と社会構造』(訳書)、49頁。

「俗流マルクス主義」や「詭弁的マルクス主義」を批判し、率直な生きた批判者であろうとした「マルクス主義者たち」等に見ることが出来る。ミルズ社会学の本領はまさにこの批判的 sociology にあると考える。

(三) 社会理論の構成 も、ミルズが今日までも生きているならば、彼の「未完の書」はどのように繰り広げられたのであるのかの想定は興味深い。いまとってはミルズ自身の社会理論がその後どのように深められ体系化されていくのかは知る術もないが、H・ガースとの共著『性格と社会構造』(一九五三年)を手懸りにしてガース・ミルズが社会理論をどのように構成しようとしていたのを知り得る。

第二次大戦後において一九四〇年代後半および一九五〇年代は現代社会についての理論的展望が特にアメリカ社会学でにわかに展開され出した時期でもある。T・パーソンズによる行為の一般理論の枠組に基づく『社会体系論』(一九五一年)、共編著『行為の一般理論をめざして』(一九五一年)、N・J・スメルサーとの共著『経済と社会』(一九五六年)、更にR・K・マートンによる社会理論における機能理論の方法論的検討を試みた『社会理論と社会構造』(一九四九年)、G・ホマンズによる社会構造の心理

的側面に焦点をあてた『人間集団』(一九五〇年)などが相次いで出版されている。ガースとミルズの共著『性格と社会構造—社会制度の心理学—』もこうした動向を反映したものである。この書は、依然理論的にも深められず、体系化されたものではない未完成の書であるとしても、「巨大な社会的、歴史的場面に登場する行為者としての個々の人間をますます見失っていく傾向」にあって、「社会的—歴史的

構造の諸タイプとの関係で人間のさまざまなパーソナリティを研究する<sup>(37)</sup>ことを目的として社会理論の構成を意図とした注目すべき書であった筈である。

この書は、基本的に(i)性格構造、(ii)社会構造、(iii)動態の三部から構成されている。「性格構造」(character structure)は、「人の社会的役割と結びついた有機体の心的構造の、比較的安定した統合体をさしている」。性格構造を構成するのは、人間有機体(human organism)(生物学的統一体としての人間)、心的構造(psychic structures)(感情、感覚、衝動の統合体)、人(person)(役割演技者としての人間)からなっている。「社会構造」(social structure)は「制度的秩序」(institutional orders)(政治・経済・軍事・親族・宗教秩序)とこれらの制度的秩序にかかわる局面(spheres)(シンボル、テクノロジー、地位、教育)から構成される。そして、図4に示されているように、「役割」が性格構造と社会構造を相互に媒介して両者を関連づけている。役割は「一般化された他者」や制度的秩序、局面を通じて形成され演じられるが、むしろ、ここでは社会的に相対化され、選択されるものとして位置づけられている<sup>(38)</sup>。

また、性格構造と社会構造を相互媒介するうえで、特に個人の社会化、人びとの格づけと生活機会、性格と心理的感情や諸制度の機能遂行、不統一を理解するうえで、この本の第一〇章「シンボル局面」、第十一章「成層と制度的秩序」<sup>(39)</sup>にあるように、シンボル、地位(この場合の地位の用語はここでは第十一章の「成層」stratificationのように広義の意味で使われている)の局面を重視していることがわかる。本章第三部「動態」は社会変動論に該当する部分であるが、社会変動を「時間とともに社会構造を構成する役割、制度、秩序に生ずるあらゆる変化」<sup>(40)</sup>を意味するものとしてとらえる。社会変動の原理的一元論や原則論的な独断的多元論に陥いることなく、客観的要因と主観的要因、日常経験の世界と制度的秩序を相互に関連づけた社会的・歴史的変動の一般的説明モデルを提示する。このような観点から「リーダーシップの社会学」、「集合行動」、制度的秩序の「支配的趨勢」(統合様式の変動)を論じている。終章の「支配的趨勢」では、ミルズの権力論三部作に連らなる、現代社会、なかでも合衆国とソ連における制度的秩序の統合様式

が「統整」(co-ordination) (ひとつまたはいくつかの制度的秩序による社会の統合) への動向、すなわち、政治、経済および軍事秩序のもつ統整作用、権力の問題をとりあげている。

ミルズの社会理論、ガースとミルズの『性格と社会構造』の特徴をめぐっては、従来はD・マーチンデール『社会学理論の性格と諸類型』での位置づけに従って社会行動主義の中の「象徴的相互作用説」としてきたが、先の制度的秩序の「支配的趨勢」に示されつつあった権力論、人が諸問題を「個人的適応」では解決し得なくなったとする官僚制の展開、<sup>(41)</sup>「労働と余暇の統一」<sup>(42)</sup> (一九五四年)、『新しい権力者たち』、『ホワイト・カラー』、『パワー・エリート』の権力三部作、『第三次世界大戦の原因』 (一九五八年)、現代社会における人間の不安、無関心、不道徳性、責任等の問題を鋭くえぐり出した『社会学的思想像力』 (一九五九年) に至って、むしろ葛藤・闘争理論的な色彩を強めていくのである。<sup>(43)</sup> ミルズの世界社会論の構成は、多くはそのための分析的図式を提示したにすぎないといえないこともないが、数多くの理論仮説、作業仮説が内包されているものとしてとらえ直し、深めていくこともできる。また、象徴的相互作用論と葛藤・闘争理論とは相互に排他的なものなのかどうか、葛藤・闘争理論のパスpekティブから、ミルズの世界社会論を再構成していく可能性も検討されなければならないだろう。

#### 四、個人的問題と公共的問題

「社会のいかなる研究も、生活史 (biography) の諸問題と歴史 (history)」、さらに社会における両者の相互透過の問題にまで立ち至らないならば、その探求の道程を完了したとはいえない。<sup>(44)</sup> 先に触れたミルズの世界社会論の構成「社会分析のための分析枠組に対応するかたちで、①「ある特定の社会を一つの全体としてみた場合、その構造は何か」(社会構造)、②「この社会は、人間の歴史のなかでどこに位置しているか」(動態・歴史の変動)、③「この社会、この時代には、どんな種類の人間たちが支配的であるか」(性格構造・人間の行為と性格)、とを相互に関連づけた社会研究の必

要性を説く。

すぐれた古典的な社会分析家はいずれも、こうした関連を問い続けてきたのであり、ミルズもこの伝統を継承することを意図して、アメリカ合衆国を主な対象に現代社会の社会分析、特に権力論を中心に展開したといえる。この分析枠組だけをとれば、マルクスとエンゲルスが「諸個人はいつでも自己から出発した。もちろん彼らの与えられた歴史的条件と諸関係の枠内での自己からであって、イデオログたちの念頭にあるような「純粋な」個人から出発したのではない」といい、人の歴史をとらえるための前提としたマルクス・エンゲルスのいう「現実的諸個人、彼らの行動、および彼らの物質的・生活物質的生活諸条件——既存の生活諸条件ならびに彼ら自身の行動によって産出された生活諸条件<sup>(45)</sup>——」の枠組とは、共有される面もあるが、やはり両者は基本的に異なる。ミルズは、一面で「率直なマルクス主義者」としてマルクス自身の遺産をも受け継ぎマルクス主義に強い関心を抱き続けたとしても、他面では二〇世紀における現代社会的状況のもとでマルクスに対する自由で率直な批判者、アメリカのプラグマティズムの批判精神を身につけた疑い<sup>(46)</sup>つづける懐疑者であった。また「理性と自由」、「自己自身の大切な諸価値にしたがって、自分で方向を決定するという人間の能力<sup>(46)</sup>」の可能性を説きつづける啓蒙者であった。

(一) 社会学的想像力 ミルズが主張するこの「社会学的想像力」ということばに、批判者、懐疑者、啓蒙者としての彼の特徴が見事に示唆されている。社会学的思想力とは、「情報を駆使し理性を發展させることによって、かれら自身の内部や世界におこることがらを、明晰に総括できる精神の資質にほかならない。」<sup>(47)</sup>そして、「この想像力をもつことによって得られる最初の収穫は、みずからをその時代の中に位置づけることによってのみ自己の経験を理解し、自己自身の運命をおしはかることができ、また周囲にいるすべての人々の生活機会に気付くようになることによって、はじめて自分の生活の機会をも知ることができるのだ、という考えをもつことである。」<sup>(48)</sup>それまではなんとなくすみなれたものと思ひ込んでいた家の中で、突然眼がさめたと感じたり、驚くという能力がふたたび、いきいきとよみがえる。

ミルズは社会学的想像力を培うことによつて、現代社会の社会分析を、「個人環境にかんする私的問題 (the personal troubles of milieu)」と「社会構造にかんする公的問題 (the public issues of social structure)」とを接合していく試みとして、展開しようとする。私的问题是、「一個人の性格の内部で、また他人との直接的交渉の範囲のなかでおこる。」これに対して公的問題は、「ある個人の限られた環境や、かれの内面生活の範囲をこえた事柄に関連している。」例えば、結婚、大都市、労働と余暇、失業、戦争等の問題にしても一面では確かに身近かな個人的状況の問題であるけれども、それを適切に理解し解決を図ろうとするには、それを越えた歴史的社会的な公的問題としてとらえ直し関連づけていくことが必要である。<sup>(49)</sup> 現代社会における人々の私的な生活状況における不安と公的な問題に対する無関心が、<sup>(50)</sup> 一体どのような様相で底流しているのか、それらがどこからくるのか、結果的にどこへ向うのか、どこに漂流していくことになるのか。ミルズは、われわれに必要なことは、こうした不安と無関心の状況に浮き沈みすることではなく、また社会学者が「誇大理論」を振りかざし概念の物神化にひれ伏すことでもなく「調査主義」にひた走ることでもない」と主張する。社会学的想像力を駆使して、現代における不安と無関心の特徴を人間の声として、(ミルズの場合には多分に知的職人としての知識人こそが) 聴き取り見据え、かつ批判し続けていくことが、大切なことである。

(二) 社会成層論と権力論 社会学的想像力に示唆されたミルズの基本的な考えを反映して、ミルズの現代社会分析は、主に権力論を中心に展開された。『新しい権力者たち』、『ホワイト・カラー』、『パワー・エリート』の権力三部作や『第三次世界大戦の原因』、『聞け、ヤンキー』等にしてもやはり権力論をめぐって試みられた現代社会分析の著作である。

ミルズの権力三部作については、労働者階級、中間階級、支配階級の階級三部作として位置づけることも可能だが、中心的な課題は権力論に向けられているのであって権力三部作としてとらえるのが適切と考える。従来、権力論の内容をめぐって、一元的なパワー・エリートか多元的な権力配分等をめぐって、論争がなされたが、ミルズの社会成層

論そのものについてはあまり論じられてきていない。ミルズの社会学を根底からつき動かしたつづけた現代の「理性と自由」の問題、そして社会成層論を考えると、階級論を重視しつつも、むしろ権力論、支配論に焦点を向けていたことがわかる。

ミルズの成層論 (the sociology of stratification) には、マルクスとヴェーバーの影響、特にヴェーバーの影響が強く見受けられる。ミルズの仕事のうち比較的初期のものであるL・ウォーナーの著作についての書評等にすでにミルズの成層論の基本的な骨格が示されている。この当時丁度H・ガスとともに、ヴェーバーの著作からの英訳を進めていた頃でもある。この英訳書にはヴェーバーの『経済と社会』のうち、第二部第八章の政治的共同体をめぐる「階級、身分、党派」(class, status, party) も収められており、ミルズの成層論における多次元的理解に影響を与えていったと思われ<sup>(52)</sup>。ウォーナーの研究については、ウォーナーの使用している「階級」(class)の用語は本来「地位」(身分的地位) (status) 概念にもっとも近いものであるにもかかわらず、この階級、という言葉に(i)経済的な範疇での階級、(ii)地位(身分的地位)、(iii)権力 (power) の三つの概念の区別が全くあいまいなままに、また階級と階級感、階級と地位感の区別とがあいまいなままに、資料蒐集がなされ、「上の上」から「下の下」にいたる六つの階層分析、平板な統計的な解説、非歴史的研究がおこなわれており、その「政治的想像力の欠如のための保守主義」<sup>(53)</sup>を批判する。

ミルズの社会成層論についての考えがよく整理されているのは一九五一年に発表されている「成層の社会学」<sup>(54)</sup>である。そこでは、どういう人びとが、社会的に価値があるとされた物や経験をどれだけ定期的に受けとることを期待され、実際に受けとるのか、そしてそれぞれのレベルでなぜそうなのか、が問われる。すなわち、人びとが同じような生活のチャンス(諸種のチャンス)をもつそれぞれの階層 (strata)、その形成と存続の原因の分析等が課題となる。ミルズは、諸種のチャンスがちがいでとして、「成層の諸次元」(dimensions of stratification)を考える。具体的には①職業 (occupation) —— 特定の活動としての技能のタイプとレベル、産業上の分業内の一定の機能、②階級 (class) —— 所得額、

図5

		階 級				
		+		-		
		身	分	身	分	
権力	+ 技能	+	1	2	3	4
		-	5	6	7	8
	- 技能	+	9	10	11	12
		-	13	14	15	16

(引用) ミルズ『社会学的想像力』(訳書), 274頁。

財産と所得源泉に関係、③地位 (status) (——威信 prestige)・④権力 (power) (——他人の抵抗に逆っても自分の意志を実現させる機会であり主観的意図、客観的機会、組織化の状態、指導者の手腕等の諸要因が関連している——)の四つの次元を設定しており、それぞれの階層はこれら階級、職業、地位、権力の次元の交差によって性格づけられる人びとによって構成される。これらの考えは『性格と社会構造』(一九五三年)、『社会学的想像力』(一九五九年)でもひきつがれ、諸次元の交差を一般的にモデル化している(図5参照)。

そしてミルズの関心は社会成層の理論的体系化にあるのではなく、社会成層と権力、政治権力の問題の現実的な分析に向けられている。彼は成層論における経済的次元への偏向、「プロレタリア化」を軸とした理論化や労働者階級の必然的な革命的役割への期待、仮定等には批判的であった。<sup>(55)</sup>

「人びとには歴史をつくる自由がある」。しかし、「もし人びとが歴史形成に参加しないのなら、かれらは単なる歴史の対象と同様に、ますます歴史形成者の道具にさせられてしまう<sup>(56)</sup>」とミルズは主張する。人びとが不安に浮き沈み、公的問題に無関心でいる間に、権力は特定の人びとにますます集中し、不況—戦争—好況という戦争経済のリズムにのみこまれ、保守的ムードが支配し、権力の多くが理性的制裁にも恭順な道義心にもよらず乱用されているのではないか、というのがミルズの問題意識であり、当時の現状分析にもとづく基本的な認識であった。

権力エリートの一員としての労働組合指導者、具体的には一九四六年時点のAFL(アメリカ総同盟)、CIO(産業別組織会議)の労働組合指導者約五〇〇人の対象者を中心として当時の組合指導者の特徴と労働運動の課題を調査分析した『新しい権力者——労働組合幹部論——』(一九四八年)では、一九三〇年



代には労働組合の組織化が全国的規模で発展し反抗権力を一時的にせよ強めてきたのに、組合指導者は現存の権力、金、地位の状態における自分たちの分け前を求めて、即時的な現在にしばらくつけられている保守的な労働貴族と化している、と批判する。『ホワイト・カラー（アメリカの中間階級）』（一九五一年）では旧中間・旧中産階級と対比される新しい中間階級としてのホワイト・カラーの世界、生活様式、権力を分析している。ホワイト・カラーは、数的にも著しく増加し機能的にも重要となってきたにもかかわらず、社会からも生産物からも自我からも疎外された陽気なロボット、あわれな存在であり、巨大な権力の後衛でしかない。ミルズの分析、表現は、ミルズ自身の幼少年期のみじめな生活実感にもとづく父親に対するイメージが著しく投射されているのか定かでないとしても、誇張ともいえるほどまでに、辛辣であり悲観的である。

そして、ミルズはますます急先鋒化していき、『パワー・エリート』（一九五六年）にも向けられていく。成層論における威信階層理論や固定的な階級支配論、ロマンチックな権力均衡論等を批判する。現代においては権力の底辺と中間水準とを、決定をにぎる頂点に結びつける自律的組織が衰退しますますます官僚機構化し、民主主義が著しく形式化してきており、他方国家の拡大と軍事化が進み、経済秩序も軍事的資本主義化を強めてきているものでは、特に政治的・軍事的・経済的諸制度相互の統整が進み、それらの頂点に立つ軍部上層部、会社最高幹部、政治的幹部の決定は重要なものとなり、彼らは互いに接近し権力エリートを形成していく、とする。公衆社会に対比される大衆社会においては、<sup>56</sup>人々は政治的帰属感と政治的意志を失いつつあり、政治的に分断され無力と化していく。そして多くの人々の道徳的無防備と政治的無関心に支えられて、上層部の道徳的腐敗、不道徳性、無責任、成功の不道徳性の感覚がひろがり制度化すらされていく。ミルズは敢えてこうした傾向を鋭くえぐり出すのである。

(三) 移民と国際関係 共著『プエルトリコ人の旅路—ニューヨーク市へのもっとも新しい移民者たち—』（一九五〇年）は、ミルズの関心が相対して労働者や移民等に集中していた一九四〇年代の調査研究である。本書はミルズ、C・

セリオア、R・K・ゴールドセンの共著であり、アメリカの労働者下層の大部分を占めるアフロ・アメリカン、メキシカン・アメリカン、プエルトリコ人等のうち、プエルトリコ人移民者の生活実態を調査報告したもので、巻末に質問紙の質問内容やサンブルの詳しい説明を付した調査報告書である。具体的には、ニューヨーク市のマンハッタンの Spanish Harlem 地区とブロンクスの Morrisania 地区に居住するプエルトリコ人一、二三人についての一九四八年実施された面接調査に基づくものである。共著とはいえ、ミルズ社会学の全体像を知るうえで、もっと注目されてよい調査研究である。合衆国とプエルトリコ本島との関係が、先進国、第一世界に貧しい植民地経済社会、第三世界を組み込んでいく過程としてとらえられており、合衆国の経済変動にはほ相関する形でプエルトリコからの移民労働者が構成されている。<sup>(60)</sup>そして移民労働者としての彼等の生活実態は、一般に云われてきた「順応を通じての適応」は困難であり、ほとんどが最低限の肉体的欲求を満たすのにほんろうされており、将来をじっくり考える時間的余裕もっていない。いわば、るつぼ的な順応や文化的多元主義ではとらえきれない、制度的に閉ざされた世界をつくりだしているとする。

このようにしてミルズの社会分析は、権力論を中心にしながら、移民、社会体制、第三次世界大戦の原因、国際関係などの問題へと広がり歴史社会学的、比較社会学的分析にも及ぶようになる。『第三次世界大戦の原因』(一九五八年)に示された、大胆に見据えたミルズの眼は冷徹である。ミルズは、第三次大戦の原因の大部分は、道徳的・政治的想像力の欠如にもかわからず、大国のパワー・エリートが大戦を必然として受け入れそれを予想することが、アリズム、だとする見解、行為、政策、そして国民、国家の名においてそれらを準備し遂行しようとする官僚的・致命的な構造の存在、恒久的な戦時経済、更に民衆の大衆の無関心、道徳的無感覚等にあると指摘する。いまや戦争は全面的になり、不条理になったという。これに対して、ミルズは、戦争を歴史的運命とするのではなく、政治責任という視点に立った政治的争点として、また、知的問題としてとらえることを主張する。超大国の指導者が相互に交渉し合う

諸条件と知識人の果すべき役割を具体的に提示している。<sup>(61)</sup>

世界歴史上初めて人びとは、交戦国のうちどの一国として勝つことのできない——かれらはおたがいのことを認めているのだ——戦争のために準備を進めている。かれらには「勝利」がどんなことを意味するのかというイメージがなく、また勝利への見当もつかない。

一方が防衛だと考えるものを、他方は脅威だと考える。どちらも開戦の渦巻にまきこまれたまま、自分じしんのおそろしい見通しによって、また他方への恐れによって畏にとらわれている。どちらも致命的な悪循環のなかで、動きまた動かされる。

情況は次のことに帰着する。すなわち、軍事道路のどんづまりにきている。それは死以外のどこにも通じない。戦争が起れば、世界中の国民がともだおれするだろう。しかも第三次世界大戦の準備こそは今日の世界の指導的諸社会のもっとも奮励してやまぬ全力をそそいでいる努力なのである。戦争は全面的になってしまった。そして戦争は不条理になってしまった。<sup>(62)</sup>

更に、ミルズは『聞け、ヤンキー』（邦訳『キューバの声』）（一九六〇年）の中で自ら一九六〇年にキューバを訪ね、聞き見て、キューバの歴史とキューバ革命が何を意味するかを、北米の一部ではない、南米の一部であるキューバの民衆の声、広く空腹民族世界の声を冷静に聞き入れることを求めた。そして、ミルズはキューバ革命をアメリカの第三世界への対外援助、冷戦戦略、共産主義封じ込め政策等を再考させる好機と考えていた。キューバ人の声にキューバ人、空腹民族の民、そして自らをも託して「わたしたち自身の生涯を生きるために、そしてまたその生涯をわたしたち自身の国で生きるために、これらふたつの権利のためにわたしたちはもうたくさんだけの検討をしてきました。それからこれもまたたくさんさんの労働を。そしてあなたがた、アメリカ人さん、あなたがたもまた昔むかしにはそれだけのことをしてきたのです。しかしあなたがたはいま何をしようとしているのですか？　そして米国はいま何を

すべきだと考えているのですか？ それがわたしたちキューバ人が不思議に思っていることなのです。」<sup>(63)</sup>

米国のベトナム戦争への本格的介入、キューバでのソ連のロケット基地建設をめぐる危機を前に、ミルズは一九六二年三月二〇日に急逝した。彼は権力論を軸とした鋭い社会分析を通じて、われわれの時代の一人の歴史的証人として、そして人間の歴史的な歩みを確実なものにするために絶えず疑い闘い続けた批判的知識人として生きた、といえる。

## 五、むすび

ミルズの知的葛藤と知的遺産をもちや時流からかけ離れたものとして、ミルズ社会学の全体像をいまだ十分に検討しないままに、忘れ去ってよいものであろうか。

確かに、ミルズ社会学、社会理論に内在している問題点も少くない。例えば、社会理論の構成における基本的な枠組としての性格構造―役割―社会構造の関連構造が提示されているが、その内容や展開においては必ずしも精緻化されているとはいえない。ミルズが主たる関心を示した社会成層論や権力論、権力論と階級論の関係、大衆社会論、社会変動論にしても、現代社会における社会分析としては鋭いが、理論的には十分に深められなかったといえる。またミルズの論理展開や分析手法の特徴が、「相関分類」法の如く、現象を二極化し単純化することによって、問題が鮮明に対照化されたり問題発見的ではあっても、対極面を過度に単純化して強調し論戦する傾向が著しい。更に、重要なことであるが、ミルズ社会学がこの小論で示唆したように「人間の声」を基軸にしたがらその「人間の声」を民衆生活、個人生活史、民衆史等にまで掘り下げて関連づけることができたろうかという点ではやはり不十分なままに問題として残されたといわなければならないだろう。多分に理想化された公衆社会のイメージから知識人の声、知的職人の仕事に集中し過度に期待を寄せすぎているくらいがないでもない。しかし、ミルズの知識社会学、批判的社会

学が、物神化する科学の動向に対して現代における人間の声の発掘、再発見の動きとしての象徴的相互作用論、現象学、エスノメソドロジー、社会史、個人生活史、オラル・ヒストリー、そして古典的社会科学等への関心を再び促してきたともいえる。そして、ミルズが構想していて、彼の急逝によって途絶えてしまった、比較社会学、歴史社会学に関する研究が「未完の書」<sup>64</sup>になってしまったことは極めて残念である。

しかし、われわれがミルズ社会学、社会理論から学び得るものは多い、と考える。この小論ではその全体像の再考察を十分に深めることはできなかったとしても、われわれの現在の社会学の状況に照らして、いくつかの諸点で重要な課題を依然提起し続けている。

(i) 社会思想、理論、方法、分析の統合化——この小論で検討したように、それらがそれぞれの領域・分野に分断され過度に専門化されずに、ミルズ社会学においては一人の人間としての知的職人が自らの思想、理論、方法、分析と共に絶えず練磨しつつ歴史的課題に明晰にたちむかおうとする知的な誠実な姿勢。

(ii) 知識社会学、批判的社会学の視座と実践——ミルズの初期の研究である『社会学とプラグマティズム』から始まって『マルクス主義たち』等に至る一連の著作を通じて、自らの思想形成、知識、思考等を現代社会の歴史的課題に照らして絶えず知識社会学的に批判的に再考察していこうとする試み。

(iii) 古典的伝統の継承と批判——自らの母国であるアメリカ合衆国の知的伝統——例えば、パース、ジェームズ、デューイ、G・H・ミード、ヴェブレン等だけでなく、ヴェーバー、マルクス、マンハイムなど広くヨーロッパの古典的伝統をも積極的に継承していくことの大切さを主張し、しかも簡単に見切りをつけずに生涯にわたって模索し続けていること。この点では、日本の社会科学、社会学の古典的伝統の再評価とその批判という仕事も重要な課題であり得る筈である。

(iv) ミルズの社会理論のもつ可能性——確かにミルズの社会理論の構成は構成のための基本的な分析枠を提示したに

すぎない面が強い。しかし、歴史とのかかわりで人間をとらえていくうえで平明だが、重要な分析視点、座標軸を提示している。特定のパースペクティブだけに限定したり固定するというよりも、それぞれのパースペクティブの可能性と制約、対抗関係等を相互に照し出し出される座標軸をわれわれに提示している。それをどのように活用し精緻化していくかはわれわれにとっての課題である<sup>65)</sup>。

(v) 鋭い問題意識と歴史意識——ミルズの場合には問題があまり対極化される傾向があったにしても、「人間の声」を通じて現代社会における歴史をつくり出す人間の不安や無関心にこそ耳を傾ける姿勢が根底となっている。概念や理論体系、調査方法、学会組織、学問の新しい潮流等ではなく、歴史をつくり出す人間の生活、その行くえそのものに関心が集中していた。その関心を基軸にして彼の知識社会学、社会分析、方法、社会理論の構成が展開されているというべきであらう。

われわれが置かれている状況を自ら見定め、思い定めることは易いことではない。いきおい漂流するがままに身を委ねかねない。現代社会学の動向の中で、亡くなったとはいえ、依然若く、論戦的で、しかも古典的なミルズの声に耳を傾けるのも決して無駄ではないと考える。

- (一) K. Davis, "The Myth of Functional Analysis as a Special Method in Sociology and Anthropology," *American Sociological Review*, Vol. 24, No. 6, Dec. 1959.
- (二) T. Bottomore and R. Nisbet, eds., *A History of Sociological Analysis*, Heinemann, 1978. R.A. Wallace and A. Wolf, *Contemporary Sociological Theory*, Prentice-Hall, Inc., 1980. E.C. Cuff and G.C.F. Payne, eds., *Perspectives in Sociology*, George Allen & Unwin, 1979, second edition 1984.
- (三) R.W. Friedrichs, *A Sociology of Sociology*, The Free Press, 1970. 新明正道「現代における社会学の危機」「現代における社会学の学問的位置」「社会学の社会学」の社会学、いずれも新明善『現代社会学の視角』恒星社厚生閣、一九七九年、所収。

- (4) 鈴木広「たえず全体化する全体性と、たえず私化する私性」『社会学評論』(特集・日本社会の現状分析)第三四巻二号、一九八三年、四一頁。
- (5) C・W・ミルズの主な著書、訳書、編書を列記すると次の通りである。
- 1942: A Sociological Account of Pragmatism (Ph. D. dissertation) (ミルズの死後にI・L・ホロウィッツの手で出版) 'Sociology and Pragmatism: The Higher Learning in America. Paine — Whitman Publishes, 1964. 本間康平訳『社会学とプラグマティズム』紀伊国屋書店、一九六九年)。
- 1946: From Max Weber: Essays in Sociology. By Max Weber (translated and edited from the German with H.H. Gerth) (この書のうちカースとミルズによる「序説」の部分が邦訳されている。山口和男・大伏宣宏訳『マックス・ウェーバー(その人と業績)』シネルヴァ書房、一九六二年)。
- 1948: The New Men of Power: America's Labor Leader. Harcourt, Brace & Company. 河村望・長沼秀世訳『新しい権力者—労働組合幹部論—』青木書店、一九七五年。
- 1950: The Puerto Rican Journey: New York's Newest Migrants, with C. Senior and R.K. Goldsen. Oxford Univ. Press.
- 1951: White Collar: The American Middle Classes. Oxford Univ. Press. 杉政孝訳『ホワイト・カラー(中流階級の生活探求)』創元新社、一九五七年。
- 1953: Character and Social Structure: The Psychology of Social Institution (with H.H. Gerth). Harcourt, Brace & Company. 古城利明・杉森創吉訳『性格と社会構造』青木書店、一九七〇年。
- 1956: The Power Elite. Oxford Univ. Press. 鶴飼信成・綿貫讓治訳『パワー・エリート(上・下)』東京大学出版会、一九六九年。
- 1958: The Causes of World War Three. Simon & Schuster. 村上光彦訳『第三次世界大戦の原因』みすず書房、一九五九年。
- 1959: The Sociological Imagination. Oxford Univ. Press. 鈴木広訳『社会学的想像力』紀伊国屋書店、一九六五年。
- 1960: Listen, Yankee: The Revolution in Cuba. McGraw Hill Book Company. 鶴見俊輔訳『キューバの声』みすず書房、一九六一年。
- 1960: Images of Man: The Classic Tradition in Sociological Thinking (anthology with introduction), George Braziller, Inc.
- 1962: The Marxists, Dell Publishing Co. 陸井四郎訳『マルクス主義者たち(上・下)』青木書店、一九六四年。

- 1963: *Power, Politics and People: The Collected Essays of C. Wright Mills* (edited by I.L. Horowitz), Oxford Univ. Press.
- (ハ) これはやはりホロヴィッツがミルズの死後に、ミルズの初期論文を始め多くの論文を収録したもので、ミルズ研究に欠かせない書物である。また、この書の巻末には、ミルズの詳しい著作目録と、ミルズに関する諸論文の文献目録が付してある。青井和夫・本間康平監訳『権力・政治・民衆』みすず書房、一九七一年。
- (ロ) ミルズについての論評については前出の『権力・政治・民衆』(一九六三年)でのホロヴィッツによる「序論」C・W・ミルズについて、「および巻末の文献目録を参照のこと。ミルズについての比較的まとまった研究書としては、H・アプセーカ(陸井三郎訳)『ライト・ミルズの世界』(原典は一九六〇年に出版)、青木書店、一九六二年、Irving L. Horowitz, ed., *The New Sociology: Essays in Social Science and Social Theory in Honor of C. Wright Mills*, Oxford Univ. Press, 1964. M. Stein and A. Vidich, eds., *Sociology on Trial*, Prentice-Hall, Inc., 1963. J.A. Scimecca, *The Sociological Theory of C. Wright Mills*, Kennikat Press, 1977. Howard Press, C. Wright Mills, Twayne Publishers, 1978. I.L. Horowitz, C. Wright Mills: *An American Utopian*, The Free Press, 1983. J.E.T. Eldridge, C. Wright Mills, (Key Sociologist Series), Ellis Horwood Limited and Tavistock Publications Limited, 1983. Rick Tilman, C. Wright Mills: *A Native Radical and His American Intellectual Roots*, The Pennsylvania State Univ. Press, 1984.
- (メ) J.A. Scimecca, op. cit., p. 111.
- (モ) わたしの知るかぎりでのわが国のミルズ研究の主なものを挙げれば、田口富久治「C・ライト・ミルズ」「パワ―エリート」『思想』、一九五七年、永井陽之助「大衆社会における権力構造―D・リースマンとC・W・ミルズの権力像の対立をめぐって―」『思想の科学』、一一号、一九五九年、馬場明男「ベル教授の批判によせて―ミルズのパワ―エリート」『社会学論叢』、一四号、一九五九年、宇賀博「行為理論と社会構造の概念―パースンズとガース・ミルズについて」『社会学評論』、一〇巻二号、一九六〇年、森好夫「マートンとミルズ―社会学の反省―」『人文研究』(大阪市立大学)一一巻一一号、一九六〇年、居安正「エリート理論の成立」『関西大学社会学論集』、一九六七年一〇月、船津衛「C・W・ミルズの社会分析」『社会学年報』二号、一九六六年、船津「C・ライト・ミルズの知識社会学」『山口大学教育学部研究論叢』第一部、二十巻、一九七二年、船津「C・W・ミルズとシンボリック相互作用論」船津著、『シンボリック相互作用論』所収、恒星社厚生閣社、一九七六年、森博「パワ―エリートの現状と未来」『季刊社会科学』、一三号、一九六八年、矢沢修次郎「社会学とプラグマティズム」『思想』五五九号、一九七一年一月、鈴木不広「ミルズの理論」新明正道監修『現代社会学のエッセンス』所収、ベリかん社、一九七二



年、伊奈正人「科学」フェティシズムと創造的想像力—カーライト・ミルズの社会学的想像力についての一考察—『橋研究』七巻一号、一九八二年。ミルズの全体像についての比較的まとまった解説として、前出訳書『性格と社会構造』の巻末の「解説」（古城利明・杉森創吉）がある。

(9) 新明正道『現代社会学の視角』（前出）、五六頁、六四頁、高橋徹「ラディカル社会学」運動』『思想』五八七号、一九七三年五月。

(10) 副田義也「社会的行為」北川隆吉監修『現代社会学辞典』有信堂高文社、一九八四年。このなかで副田が、「ミードやカースミルズにあった社会的行為の理論から社会構造の理論への連結の可能性が、現在活躍中の象徴的相互作用論者ではほぼ消滅している。その可能性を回復しなければならぬ」（一四一頁）と述べている。この注目を要する。

(11) J.A. Seinecca, op. cit., p. 9.

(12) この当時のチキサス大学の教授陣およびミルズに特に影響を与えた George Gentry, David L. Miller, Carl Rosenquist, Warner E. Gettys, Clarence Ayres などについては、IL. Horowitz, C. Wright Mills, op. cit., pp. 18-35 に詳しい。

(13) J.A. Seinecca, ibid., p. 12.

(14) Hans Gerth, "On the Passing of C. Wright Mills," Berkeley Journal of Sociology, vol. VII, No. 1, Spring 1962, p. 1.

(15) IL. Horowitz, C. Wright Mills, op. cit., pp. 38-54, C.P. Loomis and Z.K. Loomis, Modern Social Theory, R.E. Krieger Publishing Co., 1961. このなかで chapter 2, Howard P. Becker-Typological Analyst をとりあげている。J. Bensman, A.J. Vidich, and Nobuko Gerth, eds, Politics, Character, and Culture: Perspectives from Hans Gerth, Greenwood Press, 1982.

(16) ミルズの生涯を知るうえでは、特に前出の J.A. Seinecca, IL. Horowitz, J. Eldridge, H. Press, などの研究書を参照した。

(17) 前出訳書『社会学的想像力』の「付録、知的職人論」。

(18) 同訳書、二九二—二九四頁。

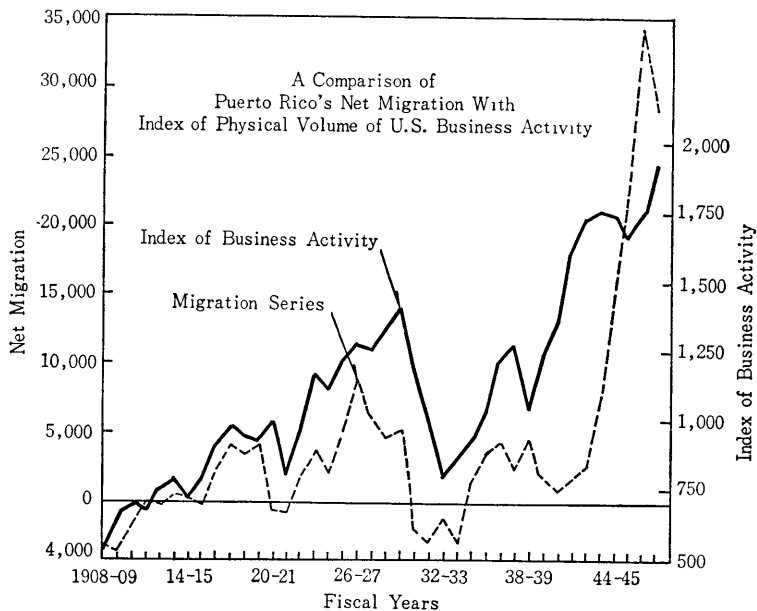
(19) ミルズは「性格と社会構造」のなかで、言語、役割、人とを関連づけながら「言葉を用いることは、对人的行為のもっとも重要なメカニズムであり、知識の主要な源泉である」（同訳書九六頁）としている。ミルズは二つの人間の声、音を区別する。一つは、「かれが大声で叫び小声でささやき含み笑いをしたり」とにかくいづれもそこに在る人間であることから生じてくる「人間の声」であり、他は、人間の声をつかわない、非人間的な発音装置のとき、音であると区別している（『社会学

- 的想像力』訳書、二八八―二八九頁。そしてミルズは、人間の声を見聞し、人間の声で語りかけていくことを主張しており、この姿勢は彼の後半期において特に強く貫かれている。
- (20) 前出訳書『社会学的想像力』二九〇頁。
- (21) *Sociological Imagination*, p. 213. 同訳書『二七九―二八〇頁』。
- (22) J. Eldridge, C. Wright Mills, op. cit., pp. 37-44.
- (23) 『社会科学研究の二つのスタイル』(一九五三年論文) 前出訳書『権力・政治・民衆』所収。
- (24) 同書、四三三―四三四頁。
- (25) I. L. Horowitz, C. W. Mills について、ミルズ『権力・政治・民衆』(前出訳書) 一八頁。I. L. Horowitz, C. Wright Mills, op. cit.
- (26) John Rex, *Discovering Sociology*, Routledge & Kegan Paul, 1973, p. 179.
- (27) *Images of Man: The Classic Tradition in Sociological Thinking*, 1960.
- (28) 「言語・論理・文化」(一九三九年)、「知識社会学の方法論上の帰結」(一九四〇年)、「状況化された行為と動機の語彙」(一九四〇年) 及び『権力・政治・民衆』(前出訳書)に収録。「Karl Mannheim, *Man and Society in an Age of Reconstruction*, *American Sociological Review*, Vol. V, No. 6, 1940, pp. 965-969.
- (29) "Introduction" (to the Mentor edition of T. Veblen, *The Theory of Leisure Class*, New American Library, 1953.)
- (30) *Images of Man*, op. cit., p. 4. 『社会学的想像力』(前出訳書) 一七〇頁、一八八頁。
- (31) 『社会学的想像力』二〇七頁、二二四頁。
- (32) 同書、二二八頁。
- (33) 同書、一五八頁。
- (34) アメリカや日本における知識社会学のこの当時の研究および研究動向を知るものとして、H. Otto Dahike, "The Sociology of Knowledge" in *Contemporary Social Theory*, eds. by H.E. Barnes, H.P. Becker, and F.B. Becker, D. Appleton-Century Company, 1940. R. K. Merton, "知識社会学"『カール・マンハイムと知識社会学』『社会学理論と社会構造』(一九四九年) 所収、新明正道『知識社会学の諸相』宝文館、一九三二年。この当時大学院生のミルズは先の Barnes and Becker, eds., *Contemporary Social Theory* の巻末に知識社会学等の社会学の諸分野の文献目録を作成して載せている (pp. 889-912)。

- (35) マートン(森東吾・森好夫・金沢実・中島竜太郎訳)『社会理論と社会構造』みすず書房、一九六一年、四一七頁。
- (36) 「言語、論理、文化」「知識社会学の方法論上の帰結」「状況化された行為と動機の語彙」(いずれも前出論文)。「古代中国の言語と観念」(一九四〇年論文)『権力・政治・民衆』所収、マンハイムについての書評(前出)。「Max Lerner, Ideas are Weapons, Franz Neuman, Behemoth, についての書評等」数多くの書評を試みてゐる。D.L. Phillips, "Epistemology and the Sociology of Knowledge: the contribution of Mannheim, Mills, and Merton," *Theory and Society*, 1, 1974, pp. 59-88.
- (37) 『性格と社会構造』(前出訳書)の「\*ががき」八頁、九頁。
- (38) 同書、一一二—一一九頁。そしてこのG.H.ミードの「一般化された他者」をめぐる「われわれは一般化された他者が必然的に「社会全体」を組み入れているとは考えない。それは選択された社会のある一部を表現するものである」(傍点筆者)とあるとは注目される。この考え方は、ミルズの初期論文にもすでに示されておいたし、後のT・パーソンズの社会理論批判における「秩序」の問題をめぐるでも貫かれる。
- (39) 同書、三一五—三三〇頁。
- (40) 同書、四〇—頁。
- (41) 同書、四六—四頁。
- (42) 「労働と余暇の統一」(一九五四年論文)『権力・政治・民衆』(前出)所収。
- (43) ミルズの世界理論を明確に葛藤・闘争理論として位置づけている文献としては、J. Rex, *Key Problems of Sociological Theory*, Routledge & Kegan Paul, 1961, R.W. Friedrichs, op. cit., R.A. Wallace and A. Wolf, *Contemporary Sociological Theory*, op. cit., Ian Robertson, *Sociology*, Worth Publishers, Inc., 1981, などがある。そしてD・マーチンデル自身も『社会学理論の性格と語類型』(一九六〇年)でのミルズの世界づけを「社会行動主義」(特に象徴的相互作用説)に入れていたが、後には方法論的視座の「人文主義」と主要な実質的論点における「集合主義」の左翼陣営が交差するところに「ミルズの世界づけ」を位置づけてゐる。Don Martindale, *Sociological Theory and Problem of Values*, Charles E. Merrill Publishing Co., 1974, p. 235.
- (44) 『社会学的想像力』(前出訳書)八頁。
- (45) マルクス・レーニンゲルス『フイツ・イデオロギー』『マルクス・エンゲルス全集、第三巻』(一八四一—四六年)、大月書店、一九六三年、七一—七二頁、一六頁。

- (46) 『社会学的想像力』(前出)・五頁。
- (47) 同書、六頁。
- (48) 同書、六―七頁。
- (49) 同書、一〇―一四頁。
- (50) 同書、一四―一七頁。
- (51) 「近代的コミュニティの社会生活」(一九四二年)『権力・政治・民衆』所収。W. Lloyd Warner and Paul S. Lunt, *The Social Life of A Modern Community*, American Sociological Review, Vol. VII, April, 1942, pp. 263-271.
- (52) H・ガースと共に訳したM・ヴェーバーの英訳書『From Max Weber, op. cit., Chapter VII, Class, Status, Party (Klassen, Stände, Parteien)を参照。』  
 ところが、ほぼ同じ頃にA・M・ヘンダーソンとF・パーソンズによって英訳されたA.M. Henderson and T. Parsons, *Max Weber: The Theory of Social and Economic Organization*, The Free Press of Glencoe, 1947. ぐま「支配の諸類型」のものが、「Stände und Klassen」の部分訳されているが、パーソンズ訳ではこの部分は「Social stratification and class structure」(pp. 424-429)となっている。また「Social Strata and Their Status」という、特にStändeの訳をめぐって両者の間に明らかに相異がみられる。  
 (53) 「近代的コミュニティの社会生活」(前出論文)。

図6 合衆国の経済活動とプエルトリコ移民者数の相関



五七頁。

- (54) 「成層の社会学」（一九五一年論文）『権力・政治・民衆』（前出）所収。
- (55) 同論文、『権力・政治・民衆』（前出）二五六―二五七頁。
- (56) 「アメリカ社会の権力構造」（一九五八年論文）『権力・政治・民衆』（前出）所収。
- (57) Richard Gilliam, "White Collar from Start to Finish: C. Wright Mills in Transition" *Theory and Society*, vol. 10, No. 1, 1981, p. 5.
- (58) ミルズによる公衆社会と大衆社会の特徴の対比については、『パワー・エリート』（前出訳書）（下巻）、二〇五―二〇九頁。
- (59) C. Wright Mills, Clarence Senior, and Rose Kohn Goldsen, *The Puerto Rican Journey*, op. cit.
- (60) 図6に示されているように、合衆国の経済活動の波動とメルトリコ人の移民者数とが相関する形を示している。The Puerto Rican Journey, pp. 43-45, p. 185.
- (61) 「第三次世界大戦の原因」（前出訳書）の「第三部、なにをなすべきか」「第四部、知識人の役割」参照。
- (62) 同書、三一五頁。
- (63) 「キューバの声」（前出訳書）、二七六―二七七頁。
- (64) I. L. ホロヴィッツ「C. W. ミルズの未完の書」ミルズ『権力・政治・民衆』（前出訳書）所収。
- (65) 塩原勉編『社会学の理論II』（ラジオ大学講座）日本放送出版協会、一九八四年、この中で塩原勉は「この意味で今日の社会学の状態はこれまでになく理論的多元主義の長所をいかしやすいいえる状態なのであって、けっして危機の徴候を示すものでないといつてよい。ただ一つの統合的 sociology が支配することは、私たちにとって危険であり不幸である」（一三四頁）と述べている。